

障害科学学会2007年総会

ショート講演

特別支援教育に期待すること

大塚 明俊

はじめに

シンポジウムにおける4人の先生方のご提言で要点は尽くされているが、半世紀以上にわたる障害児教育との関わりからいささか私見を述べさせていただく。特別支援教育とて真っさらのものではなく、戦前、戦中、戦後にかけてのわが国なりの実践の集積の上に今日があるわけである。どのような新しい試みであれ、この現実を無視しては望ましい発展にはつながるまい。先進国信仰などほどほどにして自前の実績を評価して、子どもをマキシマム・グロースさせる教育をこそ追求すべきではないか。これが特別支援教育をして実効あらしめる最短の道程である。そのような前提の下に私なりの体験をも踏まえて特別支援教育に託する願いを三点にしばって紹介しておく。

1 社会や学校のノーマリゼーションや、ソーシャル・ロール・バリゼーションの実現を促進すること

このような状況を創出することこそ特別支援教育の使命である。「当時者である子どもや両親が希望するところで、自由に必要な教育的支援が受けられるような仕組みを充実させよ」という主張である。ここには1955年(昭30)に附属聾学校に着任して以来、今日に至る私自身と仲間たちとの大づかみな意味でのこの方向性へ向けての素朴な実践や試みの一端を紹介する。

○ 着任当初、幼稚部の年長組を担当する。子どもを手懐づけるのに苦勞するが若さに任せてあの手この手を尽くし、口話力や言語力(日本語力)をつける。1年経とうとする頃(1956年)、ふたりの子どもを小学校へ入学させることを検討し、萩原浅五郎校長(東京教育大学助教授)に相談を持ち掛ける。当初は「一般の小学校に出したところについて行けず絶対すぐ聾学校に戻ってくる。そんな残酷な扱いはすべきではない。世の中というものはそれほど甘くない。君のやり方は乱暴過ぎる。止めてはどうか」と反対される。私は「両親がそれを強く望んでいる。本人も小学校へ行きたがっている。小学校の学習や生活に何とかついていけるだけの力はついてきている。試しに出してみてもどうか」と食いさがる。最後は「君がアフター・ケアをするならば認めよう」とのことで、漸くにして校長の許可を得る。当時の一般の社会状況としては、萩原先生の指摘の方が常識であった。結果は、両名とも聾学校へ再び戻ることもなく一般の小、中、高校を経て大学を卒業する。ひとりには航空測量による地図作成の技師(5年前リストラで退職、現在自営業)、ひとりには会社勤めのあと主婦となった。前者は日本大学の理学部、後者は女子美術大学の日本画科を卒業している。○ 翌1957年、もう1名小学校の2年生に転入させる。この子も一般の小、中、高校を出て、千葉商科大学を卒業して家業のホテル業を継ぎ、今では社長というところであろうか。この時は、萩原先生ももう反対されなかったようである。この他にも附属聾学校との関わりでは、

特別支援教育に期待すること

私自身、並びに仲間たちの実践を含めれば同様のケースを数多く出している。

○ 1984年(昭59)長年勤めた附属聾学校から金沢大学へ転出する際、先生たちが全員で送別会を開いてくれた。その席で年齢の上でも先輩格に当たる中学部の上野画伯が「大塚さんは、附属聾学校に着任したばかりの頃(1955年、昭30)、校内で折あるごとに“補聴器の進歩や指導法の改善によって言語力(日本語力)や学力が付き、小学校に最初から入学したり、途中で小学校へ転校したりする子が増えて、やがて聾学校は不要になり消滅する”と叫んでいた。俺たちは幼稚部や小学部のツケをいっぱい背負った子どもの扱いに四苦八苦しているのに新任の青二才が何を言う。この野郎、ぶん殴ってやろうか、と思った。ところが今(1984、昭59)では聾学校から一般の学校へインテグレートする生徒が後を絶たず、地方の聾学校を訪れると空き教室が目立ち、大塚さんの説にだんだん近くなってきたような気がする。もしかしたら、大塚さんの読みが当たったのかもしれない。若い時の感性は当たることがある。」と、スピーチをしてくれた。思えば汗顔の到りである。

<ソーシャル・ロール・バリゼーションとして、いささか派手な事例>

○ 附属聾学校幼稚部主事時代に在籍した女の子が、聴覚障害者として日本で初めて薬剤師の免許を取得している。

○ 幼稚部生え抜きの子どもをも含めて何人も附属聾学校の卒業生が筑波大学に進学している。中には博士課程を終えた者もいる。

○ 附属聾学校の教育相談で幼児の時代、私が直かに関わったケースで筑波大の博士課程を出て筑波技術大学の先生をしている人もいる。

<ごく、ささやかな事例>

○ 当人は東洋大学を出て大手の有名銀行のひとつに勤める45歳を迎えた聾の女性である。日常的には、任された仕事を着実にこなすベテランの目立たない縁の下の力持ち的存在の社員のひとりに過ぎない。ところが、彼女は何か仕事をする上で資格の取得を求められる事態が生じ

た時は、真っ先に挑戦し、しかもなるだけ1回で試験をパスするよう常に心がけているそうである。それによって彼女の存在が、なくてはならない人、障害はあっても能力ある人として見直されたり、認められたりするからだそうである。しかし、このようなチャレンジも自己教育力や自己啓発の意欲なくしては成立し得ないことである。まさにソーシャル・ロール・バリゼーションではないか。

2. メイク・ザ・レコードの教育を目指すこと

現状の到達レベルをもって満足してはいけないう主張である。極端な比喩を用いれば、桐ヶ丘養護や附属盲、附属聾は附属の小、中、高と張り合うぐらいの教育を実現すべしという論である。そこまで行かずとも一般の小、中、高と競えるぐらいの力をつけよ、場合によってはそれを超えるぐらいに子どもを伸ばすという発想である。一見不可能を可能にする、少なくとも限りなく可能に近づけるといのが特別支援の特別支援たる所以ではないか、たとえ附属大塚養護のような場合であれ限りなく質の高い教育を志向し、子どもを伸ばせるだけ伸ばそうではないかという論である。ケースによっては、あるいは局面によっては異常性の価値化という路線でのメイク・ザ・レコードも大いにあり得るのではないか。特別支援教育にはメイク・ザ・レコードなど馴染まないという考え方もあるがそれこそ見当違いで、特別支援教育だからこそメイク・ザ・レコードが求められるのである。ここには1952年(昭27)前後から今日(2007年)に至るメイク・ザ・レコードへの道の聾教育における実践の一端を紹介する。○ 当時、附属聾学校と日本聾話学校においてはアメリカ直輸入のディリー・プランと称するクラーク聾学校の教育方式の追試がなされていた。国府台で初めてこの方式を眺めて、子どもの生活中心のプログラムで、しかも指導すべき素材が明示されていて、何と組織的でアカヌケのした指導法であろう、やはり舶来品は違う、流石にアメリカの聾

教育は進んでいると実感させられたのであった。熊本聾学校において既に4年間の現場体験をしていたので授業を見る眼は一応身につけていた。したがって早くこの方法をものにしなければと、心ばかりが逸りに逸ったのであった。

○ 丁度その頃、聾学校の先生たちから口話法の神様として崇められていた川本宇之助老先生(東京教育大教授)から「日本の聾教育は欧米に遅れをとっている。クラーク・スクールでは口話力をよくつけ、学力も高く、卒業生には大学進学者が何人も出ている。レキシントン・スクールでは自然な言語指導法を取り入れて成果を上げている。イギリスのマリー・ヘヤ・グラマースクールではピュア・オーラルの上、一般の学校と同じレベルの学習をしていて、卒業生には大学進学者を出している。日本も速くこのレベルまで持っていきたい。これからの先生たちは奮起して欲しい」というお言葉を頂いた。何とかしてこのご期待に応えねばと思ったものである。

○ 1953年(昭28)か1954年(昭29)頃、附属聾学長の萩原浅五郎先生から「聾児のポテンシャルティ(潜在能力)は、ここにいる諸君(大学生や先生たち)と大体同じ位である。しかるに聾学校の教育の成果たるや高等部を卒業しても一般の子どもの小4レベル止まり、9歳レベルの胸つき八丁で立ち往生とはどういうことだ。」と大きな難問を突きつけられる。

○ 1955年(昭30)附属に着任以降、その仮説を検証すべく、かつ、それを克服すべく実践に実践を重ねる。ちなみに「9歳レベルの壁」という聴覚障害に起因する発達や学習の遅滞現象を洞察し、日本で初めて明らかにしたのは萩原浅五郎先生であったことを覚えておいて欲しい。

○ 1974年(昭49)、1975年(昭50)東京開催の聴覚障害教育国際会議、出席要請のため欧米の代表的な大学、研究所、クリニック、聾学校を歴訪するが、聾学校の中で優れていたのはイギリスのマリー・ヘヤ・グラマースクールのみであった。それ以外の学校と比べた場合、附属聾学校や日本聾話学校の方が子どもを伸ばすという意味では遙かにより成果を上げていた。また、日本の公立聾

学校にしても先様と比較して決してひけを取るものではなく、むしろ、少く上ではなかったかと思う。しかし、学校の建物、施設、設備、備品等の面では、その時代はわが国の方がまだまだ立ち後れていた。さりながら、わが国の子どもの方が伸びていたのは、教師たちの頑張りの成果であり、まさしくメイク・ザ・レコードそのものではないか。

○ 2007年(平19)の今日、建物や施設、設備、備品等の面では大きく改善され、あとは子どもをさらに伸ばすだけの時期に入ったのであるが残念ながら腰折れ現象や足踏み現象が生じていることを直視すべきであろう。安易に、簡単に、欧米モデルや国連モデルに合わせようとする、逆戻りする現象である。理由は、モデル自体の目標水準が低いからである。わが国はわが国なりの目標水準を堅持して、それに向って直進すべきである。ではどうすべきか。子どものポテンシャルティのマキシマム・グロースを限りなく追求すること、これぞメイク・ザ・レコードへの近道である。

3. トレインド・ティーチャーの育成と確保を急ぐこと

「教育は人なり」とは昔から言い旧されてきたことで、衆知の一致するところであろう。特別支援教育とてその例外ではあり得ない。如何に制度や組織、施設、設備、備品等が整っていたとしても、子どもを扱う教師に人を得なければ、全ては画に描いた餅も同然である。そこで、どのような教師を、どうやって、どれだけの数、育てるかということが主要な課題として浮上することは言うまでもない。ここに述べる「トレインド・ティーチャー」というのは、子どもの持つポテンシャルティを目いっぱい伸ばすことのできる腕っ利きの教師という意味である。参考例として、聾学校幼稚部担当の理想的な教師の要件を要約的に紹介しておく。本来的には聾学校の教師全てに共通する要件であり、さらには全ての障害児を担当する教師、それどころか一般の学校の教師にも当てはまる要件とさえ

特別支援教育に期待すること

言えるかもしれない条項である。

(1) 聾教育(ここを分野に即して読み換える。)を愛する精神を有する人、(2) 身体が健康で継続的に困難にチャレンジするスタミナと勇気を有する人、(3) 子供に対して温かい愛情と思いやりを有する人、(4) 心の平衡がよくとれていて、物の見方、考え方、感じ方、振舞い方に柔軟性がある人、(5) どんな子どもでも教育すればその子なりに必ず伸びるという教育科学的見識と信念を有する人、(6) 子どもの困難の克服に当たって実践的、行動的、かつ、意欲的である人、(7) 子どもの伸びない原因を子どもの持つ障害のせいにはしないで、教育方法の改善、工夫に努力する人、(8) 障害は24時間存在するので、24時間教育の姿勢を持って「いつでも」「どこでも」子どもに関われる人、(9) 子どもと環境条件の変化によく気がつき、状況に応じて計画や支援の方法を変え得る能力を有する人、(10) 単に遊んだり、ケアしたりするだけでなく、子どもに教えることのできる人、(11) 一般の子どもの発達や学習、教育内容等をよく研究していて、障害を持った子どもの進捗やニーズに合わせることができる人、(12) 子どもの興味や関心をそそり、しかも子どもに生き甲斐を感じさせるような状況や課題を創り出せる人、(13) 子どもとのコンタクトやコミュニケーションがうまい人、(14) 注意は機敏でありながら、動作は静かで、しかも手早く、機転が利く人、(15) 子どもの持つメインとなる独自のニーズを的確に把握してその支援に臨める人、(16) 障害がトータルオルガニズムの障害であることを常に念頭において、生活万般わたり人間形成という観点から細心の注意を払いながら指導に臨める人、(17) 両親の参加協力も視野に入れ、好ましい人間関係を保ちつつ、一体となって教育に臨める人、(18) 豊かな教養を有するとともに芸術・文化、スポーツ等の分野で一芸に秀でている人、(19) 他の専門分野の人と協力関係が結べる人、(20) 目標を意識しながらも、気負わず、気長に、休まず、こつこつと根気強く、決してあきらめずに、執念を持って、かつ大らかに子

どもと取り組める人。

<直接担当する教師育成法の重点>

(1) 学生時代 ①障害児に関わりのある学校、学級、福祉施設、病院、センター等を見学させる。②それらへのボランティアとして参加させる。③関連の研究会や親の会活動等への参加を奨励する。④特定の障害領域について主専攻、副専攻のアクセントをつけて教育実習をさせる。その場合、子どもを観る眼や子どもを扱う勘を養う上からは広く薄くでなく、狭く深くが効果的である。ともあれ、大卒で現場へ出たら直ちに何とか子どもを扱える程度の力量はつけておく必要がある。

(2) 担当教師となってから ①基本的には校内、校外の研究授業を通して、授業力のある教師へ育てていく。②校内、校外の研究会、研修会、親の会活動等に参加させ、担当者としての力量を拡げる。③関連する幼、小、中、高の教師と積極的に交流する。子どもの交流やインテグレーションのベースともなる。④関連する専門機関のスタッフと協力する。⑤コーディネーターと密接に協力する。かくして、子どものマキシム・グロースを目指すのである。

<コーディネーターの育成策の重点>

(1) 現場主体—大学(大学院)協力方式 ①特定の専門分野の教師として現場で徹底的に鍛え、子どもが伸ばせる教師にする。②障害や問題、困難等の所在を明確にする類症鑑別に必要な諸検査やカウンセリング等の方法を講義や実習を通して習得させる。ここに大学の出番がある。③多くの場を踏ませて、現場の担当者や専門機関のスタッフと好ましい人間関係が保てるようにする。④現場の担当教師や両親、場合によっては子どもに的確な助言が出来るようにする。

(3) 大学(大学院)主体—現場協力方式

シンポジウムでの先生方の提言は大方この方式であるので、そちらにお任せして省略する。いずれの方式であれ、現場を元気づけ、活性化し、子どもの成長を促進するコーディネーターの育成を目指すものであって欲しい。

これから私自身、聾学校の教師になるについて若い時分、体験しておいて良かったと思う事例を幾つか紹介する。○ 1952年(昭27)東京教育大特設教員養成部在学時代、午前中は年間を通して専ら附属聾学校の配属学級で教育実習をし、講義は午後からであった。寮では特設の美術科(聾学校の美術の教師を養成するコース)の聾の学生と全員が同室の生活をする。○ 1953年(昭28)、大学の正規のプログラムで様々な特殊学校、施設、病院等を見学する。○ 同年、藤島岳、菅田洋一郎、大井清吉らと空き時間のほとんどを附属小学校第5部の特殊学級(附属大塚養護の前身)にどっぷりと浸る。○ 同年、高木憲次先生がホームドクターをされている家の重度の脳性マヒの子どもの家庭教師を頼まれ、1年間寝食を共にする。時には高木先生直々のご指導による歩行訓練や言語訓練を拝見する。お母さんへの助言なども拝聴する。○ 同年、家庭教師が縁で、肢体不自由児全般や脳性マヒ児のことをもっと知りたくて、高木先生設立の整肢療護園の病院内学級(附属桐ヶ丘養護の前身)へ1か月ほど日参する。往復の途すがらバスや電車の中で田中恒夫先生より元気なお声でアメリカの言語治療について何う。○ 1955年(昭30)より附属聾学校の幼小部に勤める。初めの3年間ぐらいは、特殊教育学科、特設教員養成部学生の教育実習がある度に先輩教師から教生全体を対象とした指導授業を冒頭に押しつけられる。また校内の研究授業がある際は、真っ先にやらされる。しかし一度として辞退することはしなかった。結果としてその先輩たちよりこちらの方が授業に強くなったようである、「鉄は熱いうちに打て」の効果もあったのかもしれないが。いずれにしても授業という場面で子どもが扱える一人前の教師になるには、やはり修羅場の体験を数多く踏むことが必要なようである。

附属聾学校における30年の経験から省みるに、ひとりのトレインド・ティーチャーを育てるには、学部卒の教師で平均7年にかかるように思う。したがって地方の教育委員会の人事のように3年のローテーションで先生たちの入れ換えをやっていたのでは、教師としてもものにならないまま次の学校や別の種類の学校へ行ってしまうこととなる。これでは役立たずの教師を大量に創り出すようなもので税金の無駄遣い以外の何ものでもない。納税者としては税金を返せと叫びたいところである。特別支援教育には、一般の教育の10倍ぐらいの費用をかけていることにも思いをいたすべきであろう。急ピッチで進む少子高齢化の時代、いつの日か費用対効果の観点から検討課題として浮上しないかと、危惧しているところである。大学院を出た教師であれば、3年ぐらいでもクリアするようである。私も時折、授業を見せていただいているが、この会場に出席されている附属聾学校幼稚部のG先生はその実物見本だと思う。子どもたちの伸びが素晴らしい。

おわりに

いずれの分野であれ、ばらばらで構わないから、先ずはやる気のある教師を集めるところから着手しようではないか。泥臭さを恥じることなく、やれる教師、やれる学級、やれる学校から始めればよい。かくして新たなネットワークを拡げていくのである。特別支援教育の成否を決するのはやる気のある教師をどれだけ用意できるかにかかっている。目標は子どものマキシマム・グロースにあり。勇気を持って敢然と挑戦すべし。例として聾教育の課題をもって端的に表現すれば、「9歳レベルの壁を克服せよ」ということである。

為せば成る、為さねば成らぬ何事も、
成らぬは人の為さぬなりけり